

氏名	おかきた いっこう 岡北 一孝
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第681号
学位授与の日付	平成25年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	<i>De re aedificatoria</i> における第十書の位置づけと「修復」 «instaurare»の意味
審査委員	(主査)教授 石田潤一郎 教授 中川 理 教授 小野芳朗 准教授 西田雅嗣

論文内容の要旨

本論文『*De re aedificatoria* における第十書の位置づけと「修復」«instaurare»の意味』は、序章と第1章から第4章、それと終章により構成されている。

問題の所在を提示し、既往研究・学説史を辿った序章と、提示された問題に再度立ち返って本論文の意味の内包と外延を述べた終章を別とすると、第1章から第4章までの本論部分は、問題とする *De re aedificatoria* 第十書のタイトルに現れる «instaurare» の語義・語源と当時の教皇ニコラウス五世のローマ復興計画を巡る問題を扱う第1章から第3章までの部分と、そこで行われた検討を踏まえた上で、著者レオン・バティスタ・アルベルティが「修復」という語に与えた意味と *De re aedificatoria* 第十書がいかなる書であるかを検討する、本論の結論とも言える第4章の、大きな二つの部分より成る。

ヨーロッパ建築史上最重要な理論書の一つであるレオン・バティスタ・アルベルティの *De re aedificatoria* は十書から成るが、最後の第十書には、第九書までとは整合性を欠き、かつ「修復«instaurare»」という題が付されていないながら水や水利についての話題が大半を占めるという、多くの研究者たちが指摘してきた謎があった。こうした学説とアルベルティについての既往研究史を辿った序章の後、第1章では、第十書のタイトルに現れる語 «instaurare» の語義の歴史を検討する。アルベルティの時代に知識人達が参照していたに違いない主要なラテン語テキストを、古代ローマの古典文学から『ウルガタ聖書』やイシドールスなどに至るまでを吟味し、「instaurare」という語は、聖書に語られる列王の神殿再建や、権力者の行う聖なるモニュメントの修復に用いられることを指摘し、ここから、当時の教皇ニコラウス五世のローマ復興計画と *De re aedificatoria* 第十書の関連性を本論文は引き出す。

第2章では、教皇ニコラウス五世のローマ復興計画に直接関わる都市施設管理行政の同時代テキスト、所謂«Maestri di Strada» に着目し、*De re aedificatoria* 第十書との内容上の関連性を指摘し、またアルベルティの他のテキスト、特に政治的寓話『モムス』の内容と執筆年代の検討から、*De re aedificatoria* 第十書が執筆された時点では、アルベルティが教皇ニコラウス五世のローマ復興事業に関与しうる状況にあった事を論証する。それを受けて、第3章では、更により具体的に1452年以前のニコラウス五世のローマ復興事業のアドヴァイザーとしてのアルベルテ

イの可能性を、今度はジャンノッツォ・マネッティという人物との比較を通して論証する。ジャンノッツォ・マネッティの登場により 1452 年以降アルベルティは教皇ニコラウス五世のローマ復興事業のアドヴァイザーの地位を追われたとするもので、*De re aedificatoria* 第十書が書かれた時点では、アルベルティは水利事業が大きなウェイトを占めるローマ復興事業に深く関与していたと推論する。

第 1 章から第 3 章までの検証により、今まで謎とされてきた *De re aedificatoria* 第十書における水に関する内容の多さにも関わらず「修復«*instaurare*»」と題されている事などに対する答えが出され、*De re aedificatoria* 第十書が、教皇のローマ復興事業に深く関わるものであるという成立事情を明らかにし得た。

第 4 章では、以上を踏まえて *De re aedificatoria* 第十書がいかなる書であるかを、*De re aedificatoria* 全十書の検討により吟味する。各章の記述を第十書と対照することで、第十書の構造は、第一書から第九書までで述べられてきた理念を実践するものであることが示された。すなわち、アルベルティにとっての建築「創作」は、欠陥«*victium*»を修復 «*instaurare*» し、均整 «*concinnitas*» を回復する行為であることを指摘し、「*instaurare*» は、これまで *De re aedificatoria* の中心的な建築概念と言われてきた«*décor*»、「*concinnitas*»、「*commoditas*» などと共に考えるべき概念であると位置づけた。こうした論証によって、第十書は教皇ニコラウス五世のローマ復興事業という特殊な要請により動機付けされたものではあるが、全巻を凝集した構造を持っているという画期的な見解が説得力を持って提示された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ルネサンスが生んだ最も重要な建築理論家であり人文主義者レオン・バッティスタ・アルベルティ (1404-1472) の最重要著作である *De re aedificatoria* に新しい読みを提示する研究である。論文が取り組んだ問題は、水や水利について多くの紙幅を割く *De re aedificatoria* の第十書が、なぜ「修復」と題されているのかという、従来より欧米の専攻的研究者たちを悩ませて来た問題である。本論文は、「修復 «*instaurare*»」という語義の歴史的意味の再検討から始まり、アルベルティ自身の、また関係する同時代の重要資料を丹念に読み込んで、「修復 «*instaurare*»」は、聖なるモニュメントの修復に用いられた語である事を突き止めることによってアルベルティと時の教皇ニコラウス五世の行うローマ復興事業を関係づけ、1452 年以前、アルベルティはニコラウス五世のローマ復興事業の助言者の立場にあった可能性が高いことを論証する。

論証作業は、原語に依る関係資料を幅広く渉猟し、それらを緻密に読解し、年代的な考証もあわせてなされた信頼のおけるもので、論証の途上、従来の説の幾つかに対して疑念や再検討を迫る見解も導きだしている。例えば、アルベルティとニコラウス五世のローマ復興事業との関係は現在の定説では否定的な見解が主であるが、本論文では、アルベルティの他の著書の内容や年代などの綿密な考察から、1452 年を境にそれまでのアルベルティと教皇の密接な関係が変わったと指摘し、新しい見解として注目される。

本論文の第 1 章から第 3 章までで、歴史的な語義解釈、編年関係の再検証、関連一次史料の再読と新たな評価といった堅実な歴史研究手法に基づいて導きだした知見を積み重ね、本論文は、当初の問題である *De re aedificatoria* の第十書の謎に一つの明快な答えを提示するに至る。*De re*

aedificatoria 第十書が、教皇のローマ復興事業に対する答申書的性格を持つ書である故に、「修復」と題され、かつ水利に多くの頁数を割くものであると言うのがその答えで、これは、今までの研究者たちが、説得力を持っては提示し得なかった新しい見解であり、本論文がなし得た学術的貢献の最大の点である。

本論文は、この回答を得た段階に安住する事無く、第4章において、更にこの「修復」と言う意味の吟味を押し進め、結果、第十書がアルベルティの *De re aedificatoria* 全体の縮図であり、*De re aedificatoria* における建築創作の理論は、「修復」という概念との関係で説明されるという独自の視点を提示する。これは、断片的に、あるいは部分的には、直感的に既に指摘された事のある見解ではあるが、本論文は、以上のような基礎的な論証作業を踏まえた上での独自の視点を交えての考察の展開であり、十分に評価できるものである。

なお本論文の一部は、以下の二編の査読付き論文（①②）として既に公表されている。

- ① 岡北一孝、西田雅嗣：「アルベルティの *De re aedificatoria* 第十書における「*instaurare*」の意味」、『日本建築学会計画系論文集』第644号、pp.2277-2282、2009年10月。
- ② 岡北一孝：「1452年の『教皇ニコラウス五世によって承認された都市施設管理官に関する法規』へのアルベルティの関与について」、『日本建築学会計画系論文集』第679号、pp.2219-2224、2012年9月。